

---

# GALLIAN-CHRONICLES

枕遊戯

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

GALLIAN - CHRONICLES

### 【Nコード】

N6004X

### 【作者名】

枕遊戯

### 【あらすじ】

征暦1935年に勃発した第二次ヨーロッパ大戦。故郷が戦火に包まれた時、ウェルキンが寄せ集めの義勇軍を率いて立ち上がった。

失われる生命、受け継がれる想い。戦争の大きなうねりの中で懸命に生きる人間たちの物語。

## ブローグ

征暦1935年

ヨーロッパ大陸は東西二つの大国によって分断されていた。すなわち、皇帝を頂点とした先制君主国家“東ヨーロッパ帝国連合”と、王政を廃した共和国国家の連合体“大西洋連邦機構”である。

鉱物資源ラグナイトをめぐり、勢力争いを広げる両国はついに開戦。大陸は戦争の炎に包まれることとなった。第二次ヨーロッパ大戦（E・W・?）の勃発である。

圧倒的な戦力を誇る帝国軍は次々と国境を越え、侵攻を開始。その矛先は連邦のみならず、周辺諸国へも向けられた。

## ガリア公国

帝国と連邦の中間に位置し、武装中立を国是とした自然豊かな小国家である。しかし、その豊富なラグナイト資源を奪わんとする帝国はガリア公国に宣戦を布告。その領内に怒濤の如く進撃を開始した。

第二次ヨーロッパ大戦のほんの小戦線にすぎないと思われたこの地の戦いで、人々は目撃した。小国が圧倒的な軍事大国を退けた奇跡

的な勝利を。歴史の中に埋もれていた光と影を。勇気と友情、迫害と偏見を。そして、戦火の中に生まれた愛の感動を。

これは7ヶ月にもおよんだその戦いの記録である。

## 第1章 戦火の出会い

帝国と国境を隔てたブルールの人々は戦火を恐れ、次々と街を脱出しはじめていた。

「落ち着いて行動してください！隣のランドバスターまで行けば、ガリア軍がみなさんを守ってくれます！」

「元気でな！絶対すぐ戻ってこれるからな！」

人々を誘導する自警団の中に1人の女性がいた。

「元気でね、アリシア。これ、ウチで今朝焼いた最後のパンだよ」

アリシアがパンを受け取った。

アリシア「ありがとう、おばさん。手伝えなくてごめんなさい」

「なに言っただい。パン屋より自警団のほうが大事だよ。それにアリシアには旦那が亡くなってからずっと店を支えてもらったからね。アリシアの焼くパンはもう十分マイスターを名乗っていいレベルだよ」

アリシア「…どうか無事で」

「アリシアも。なにかあったら連絡をおくれ」

敬礼をするアリシア。そこに1人の女性が走ってきた。

スージー「アリシアーーーーっ！」

アリシア「どうしたの、スージー？仕事は？」

スージーが息を整える。

スージー「ス、スパイが…」

アリシア「え！？」

スージー「ダバス橋のところで1人…。まだ若い…」

アリシア「それ、本当！？」

スージー「ジャンさんとミグロさんが残って見張ってくださいます。まだ気づかれてないと思いますけど…」

アリシア「…スージー、ここはお願いね！」

アリシアはダバス橋へ走っていった。

## ダバス橋にて

ジャン「……………」

ミグロ「……………」

アリシア「スパイはどこ!？」

ジャン「……………!!」

ミグロ「なんだ、アリシアか…」

ジャン「あそこ。今は1人にいる」

ジャンが指差した先には1人の男がいる。

アリシア「……………」

ゆっくりと男に近づくアリシアたち。そして、男に銃を向ける。

アリシア「動かないで。ゆっくり両手をあげなさい」

男が両手をあげて、振り向く。

アリシア「見かけない顔ね。名前は？」

ウエルキン「僕の名前はウエルキン。キミたちは？」

アリシア「我々はブルー自警団の者です。あたしの名前はアリシア。スパイがいるという情報を得て、ここまで来たのだけれど…」

ウエルキンの手帳を見つめるアリシア。

ウエルキン「信じてもらえると嬉しいんだけど、僕は単にヒカリマスのスケッチをしていただけで…」

アリシア「魚のスケッチ、ね…。このご時勢に結構ですこと。その話の続きは詰所でゆっくりと聞かせてもらいます。拘束しなさい！」

ジャンとミグロがウエルキンを拘束する。

ウエルキン「はあ、まいったな…」

## 運命の出会い

詰所へ連れていかれるウエルキン。アリシアはウエルキンの手帳を見ている。

アリシア「魚やお花、虫のスケッチばかり…。あなた、絵が上手なのね」

ウエルキン「だから、ヒカリマスのスケッチをしていただけなんだって…」

アリシア「いえ、これだって新種の暗号かもしれない。じっくり調べさせてもらいます」

ウエルキン「はあ…」

その時、1人の少女がウエルキンを見つける。

イサラ「兄さん！」

ウエルキン「イサラ！元気だったかい？」

ウエルキンに駆け寄るイサラ。

イサラ「兄さん、一体どうしたのですか？」

ウエルキン「ははっ、ちよつとね」

アリシア「…あれ？あなたは確か、ギウンター将軍の…」

イサラ「はい、ギウンターの娘のイサラです」

アリシア「まだ疎開してなかったの？」

イサラ「はい。兄が今日、迎えに来てくれることになっていたんです。その兄というのが…、今そこで拘束されている人です」

アリシア「ええ！？」

ウエルキンの拘束が解かれる。アリシアは申し訳なさそうな顔で手帳を返す。

アリシア「ごめんなさい。メモをとっているのが見えたから、ついスパイと間違えちゃって…」

ウエルキン「いや、客観的に見たら疑われてもおかしくない行為だ」  
イサラ「兄は子供の頃から自然が好きで、今は首都の大学で学んでいるんです」

ウエルキン「これからは自分も誰かに観察されているかもしれないってことを、覚えておくよ」

アリシア「ふふっ」

これが後にガリアの英雄と称えられるウエルキンとアリシアの出会いだった。

## 第2章 コナユキソウの祈り

ウエルキン、アリシア、イサラがブルールの風車塔広場に着いた。

ウエルキン「この風車塔を見ると…、故郷に帰ってきたって気がするなあ」

アリシア「ふふっ、そうだね。親子風車あってこそそのブルールだもんね！」

しばらくしてウエルキンとイサラに敬礼をするアリシア。

アリシア「それじゃあ、あたしはこれで失礼します。帝国軍が近づいているようなので気をつけて」

ウエルキン「うん。アリシアも気をつけて」

手を振り、アリシアが去っていく。それを見送るウエルキンとイサラ。

ウエルキン「さあ、僕たちも帰ろう」

イサラ「はい」

## 帰郷

ウエルキン「イサラ、疎開の準備は進んでる？」

イサラ「はい。日用品以外の荷造りは済んでいます」

ウエルキン「帝国軍が近づいているようだから、日が暮れる前にはブルールを発とう」

イサラ「はい」

話し込んでいるうちに、ウエルキンとイサラが家に到着した。

イサラ「マーサさん、兄さんが帰ってきました」

家から1人の女性が慌てて出てくる。

マーサ「お帰りなさいませ、ウエルキン坊っちゃん」

ウエルキン「マーサさん、坊っちゃんはないだろう。僕はもう22歳になるんだよ。それに、走ったら危ないよ。もうすぐ赤ちゃんが産まれるんだろう？」

マーサ「走ったってすぐ産まれたりしませんよ。これが5人目なので慣れたもんです」

そこにアリシアとスージーがやって来た。

アリシア「こんにちは。あの…、ウエルキンいますか？」  
ウエルキン「あれ、アリシアじゃないか。どうかしたの？」  
アリシア「さっきのおわびにと思って…。はい、これどうぞ！」

ウエルキンはアリシアからパンをもらった。

ウエルキン「え…、もらっちゃっていいの？」

アリシア「あたしね、パン屋に住み込みで働いているの。戦争が始まってからはお店は休業中だけどね。あたしの手作りだから味は保証するよ。すっごく美味しいんだから」

ウエルキン「ありがとう。えっと、そちらは…？」

マーサ「あら？あなたは確か、エヴァンス家の…？」

スージー「はい。スージー・エヴァンスと申します。あの、このたびは大変ご無礼なことを…」

ウエルキン「え？なんのことだい？」

アリシア「最初にスパイがいるって報告してきたのがスージーなのスージー」も、申し訳ありません！わたくししたら、なんて失礼なことを…」

ウエルキン「いや、いいんだ。まあ、中に入ってよ」

## 父の面影

ウエルキンはいこれまでのいきさつをマーサに話した。

マーサ「…そんなことがあったんですか？坊っちゃん、大変でしたね。それにしても、かわいいお嬢さんだこと。坊っちゃんもスミにおけませんね？」

ウエルキン「え…？そんなんじゃないよ」

アリシア「そうなんです。それにあたしたち、知り合っただけから。これからお友達になれたらいいなって思ってます」

マーサ「そうでしたの。坊っちゃんをよろしくお願いしますね」

ウエルキン「おいおい、マーサさん。だから坊っちゃんはいないだろう…」

スージーが一枚の写真を見つけた。

スージー「あの壁にかかっているのは…、ギンター將軍の写真ですか？」

ウエルキン「うん。それは僕が生まれる前の写真だね」

アリシア「立派な…お父さんね。將軍の隣に写ってる方たちは？」

イサラ「右に写ってるのは私の父のテイマーです。父は技師で、將軍の戦車を設計していました」

アリシア「え…、でもイサラさんって將軍の娘さんじゃあ…？」

イサラ「両親は私を産んですぐに、事故で他界しました。1人残された私を、將軍は養女に迎え入れてくださったのです」

ウエルキン「うん。だから、僕とイサラは血のつながらない兄妹に

なるんだよ」

アリシア「…立ち入ったこと、聞いちゃったかな？」

イサラ「いいえ、気にしないでください。2人とも、私の大切な父ですから」

アリシア「そっか…。そうだね」

スージー「將軍の左に写ってる方はどなたですか？」

ウェルキン「カンクネン將軍だね。この人も父さんのかけがえのない友人さ。小さい頃、イサラがこの人をえらく気に入ってね。將軍が帰るたびに大泣きされて大変だったよ」

イサラ「…兄さん、それは昔の話です」

イサラが恥ずかしそうに頬を赤く染める。

アリシア「ふふっ、そうなんだ。あっ、もうこんな時間…。あたしたち、そろそろ失礼しますね」

イサラ「兄さん、アリシアさんたちを送ってあげてください。残っている荷物は私たちがまとめておきますから」

ウェルキン「ありがとう。じゃあ、アリシアたちを送ってくるよ」

スージー「ごちそうさまでした。それでは失礼します」

バン！

ウェルキン「……………！！！」

アリシア「今のは…銃声！？」

アリシアが窓から外を覗き込む。

アリシア「いけない、帝国軍だわ。すでに囲まれてる……」  
スージー「そんな……」

その時、マーサが座り込んだ。

マーサ「う、うう……」  
ウェルキン「マーサさん！」

スージーがマーサに駆け寄る。

スージー「いけない！陣痛が始まってます……。今動かすのは危険です」

アリシア「ええ！？ど、どうしよう……。えっと、こういう時はまずお湯を沸かして……」

イサラ「アリシアさん、落ち着いてください」

アリシア「……だけど、ここに寝かせておくわけにはいかないよ……」

イサラ「……兄さん、納屋に行きましょう」

ウェルキン「納屋に？」

イサラ「父さんたちが遺してくれたものが、私たちを助けてくれるはずです」

## 父たちが遺したもの

納屋へと移動したウエルキンたち。そこには戦車があった。

ウエルキン「これは…、父さんが乗っていた…」

イサラ「父ティマーが將軍のために一輛だけ製造したエーデルワイス号です」

ウエルキン「だけどここの戦車は…、もう10年以上も動かしていないはずじゃあ…」

イサラ「大丈夫です。いつでも動かせるように整備してあります。私が軍事教練で整備を専攻していたのは…、父のような技師になりたかったからです」

ウエルキン「整備って、イサラが1人でやったのかい？」

イサラ「基本部分はほとんど手を加えていません。エンジンに新型のタービンを搭載して、出力重量比の向上を図っております。今の時代の戦車と比較しても…、水準以上の火力と機動力を発揮できるはずです」

ウエルキン「父さんの戦車が…動くのか…」

イサラ「兄さんは機甲訓練コースを選択していましたね？」

ウエルキン「ああ…。高校の時、一応ね」

イサラ「マーサさんを戦車に乗せて安全なところに避難しましょう。戦車は私が運転します。兄さんは指示をお願いします」

エーデルワイス号に乗ったウエルキンたち。

ウエルキン「イサラ、発進の準備はいいか？」

イサラ「エンジン始動。エーデルワイス号、発進準備整いました」  
ウェルキン「まずは住民たちを逃がして、風車塔広場を抜けてから  
街を脱出しよう。エーデルワイス号、発進！」

## ブルール撤退戦

1人の帝国兵が他の兵たちに突撃の合図を送る。その時、エーデル  
ワイス号が納屋を突き破った。

「うわっ！せ、戦車だ！ガリア軍の戦車が出てきたぞ！」

帝国戦車に向かって、全速力で突っ込むエーデルワイス号。

「な、なにをしてる！撃て！」

しかし、帝国戦車はエーデルワイス号の機動力を前に照準を合わせ  
ることができない。

イサラ「兄さん、敵戦車を確認しました。対戦車戦闘用意。徹甲弾、  
装填完了」

ウェルキン「よし、敵戦車を撃破するぞ！」

ドガア！！！！

エーデルワイス号が一輦の帝国戦車を撃破した。

「くっ、総力は我が軍のほうだ！一斉にあの戦車を狙え！」

ドガア！！！！

ドガア！！！！

ドガア！！！！

次々と放たれる砲弾をかわすエーデルワイス号。そのまま帝国戦車の横を抜ける。

ウェルキン「イサラ！」

イサラ「旋回します！アリシアさんとスージーさんはマーサさんをしっかりと押さえてください！」

スージー「はい！」

アリシア「任せて！」

エーデルワイス号が旋回し、帝国戦車の後方をとった。

イサラ「兄さん！」

ウェルキン「了解！」

ドガァ！！！！

帝国戦車を撃破したエーデルワイス号。敵将はただ呆然としている。

「なんて戦車だ……。一時退却！退却だ！」

帝国軍が退却を開始した。

イサラ「兄さん、帝国軍の退却を確認しました」

アリシア「やった！すごいよ、ウエルキン！」

ウエルキン「ふう、これで少し時間が稼げそうだな」

その時、戦車内に赤ん坊の泣き声が響いた。

スージー「ウエルキンさん！マーサさんの赤ちゃんが生まれました！」

ウエルキン「ええっ！戦車の中で生まれちゃったのかい！」

スージー「はい！幸い、マーサさんも赤ちゃんも無事です」

ウエルキン「そうか……。よし、敵を警戒しつつ郊外に脱出しよう」

## 故郷を後に

帝国軍の奇襲を受けたブルールは襲撃から僅か2時間足らずで制圧された。無事郊外へ脱出したウエルキンたちは丘の上から自分たちの故郷を眺めていた。

アリシア「……………」

ウエルキン「アリシア……」

アリシア「戦争が始まって…、こうなる覚悟はしていたつもりだった。でもね、自分の生まれ育った街が壊されて…、たくさんの人たちが一瞬で死んでしまった…。こんなことが起きるなんて…、今でも信じられない」

涙をぬぐうアリシア。ウエルキンがアリシアの肩に手をおく。

ウエルキン「気ままに生きているように見える鳥や虫たちも、自分の縄張りを持つているんだ。そしてその縄張りを守るために、命がけで戦う習性がある。人間も生き物である以上…、その宿命からは逃れられないのかもしれない。でも、生き物たちは争い合っているように見えて、種族を越えて共存していることもあるんだ」

アリシア「…共存？」

ウエルキン「うん、僕はその共存の仕組みを知りたいんだ。それを知るために、自然科学を学んでいる。その仕組みが分かれば、人間の暮らしに活かせるような気がするんだ。そしていつか教師になれた時、子供たちにそれを教えていくことができたら…、争い自体をなくすことができなくても…、共に手を取り合って生きていけると

思う」

アリシア「ウエルキン…」

そこにイサラとスージーがやって来た。

イサラ「兄さん、マーサさんが眠りについたので、赤ちゃんを預かってきました」

アリシア「わあ、かわいい！」

ウエルキン「戦争の中でも生まれてくる命があるんだね」

ウエルキンが赤ん坊を受け取る。

ウエルキン「ほら…、お前の故郷だよ！」

その時、アリシアがいくつかの種を飛ばした。

スージー「あれは…」

ウエルキン「コナユキソウの種だ。小さいけれど、白くきれいな花を咲かせるんだよ」

アリシア「きつと…、ここに帰ってこようね。コナユキソウの咲くブルールに…」

ウエルキン「ああ…。いつの日か、きつと…」

### 第3章 第7小隊誕生

中立を国是とするガリア公国では国民皆兵制度と呼ばれる制度が定められていた。

この制度では各教育機関での軍事教練を単位科目として義務付けており、有事の際には一般市民が義勇軍として召集されるのだ。

ウェルキンたちをはじめとするブルールの住民たちはガリア公国の首都ランドグリーズへと避難した。

この戦争を一刻も早く終わらせるため、自分たちになにができるか……。帝国との争いが激化した今、ウェルキンたちは義勇軍に志願した。

## 召集

ウエルキン「今日からここが僕の部屋かぁ…。出頭する前に着替えておかないとな。よし、準備をするか」

ウエルキンが軍服に着替えた。

ウエルキン「照明弾に双眼鏡…。それにコンパスと地図…。か。作戦行動に必要なものは一通り揃っているな」

その時、部屋がノックされた。

アリシア「ウエルキン、入ってもいい？」  
ウエルキン「ああ、どうぞ」

アリシアが部屋に入ってきた。

アリシア「ウエルキンも着替え終わったんだ？ふーん…。うん、よく似合ってる！かっこいいよ。ねえ、あたしはどうか？新しい軍服…。似合ってる？」

ウエルキン「そうだなあ…。うん、よく似合ってる。すごく着慣れている感じがするなあ」

アリシア「…ホントに？無理して言ってない？」

ウエルキン「無理なんかしてないさ。凜々しくて、すごくいいと思う」

ウエルキンの言葉にホツとするアリシア。

アリシア「はあ、よかった…。似合っているかどうか、不安だったんだ」

ウエルキン「特に腰のあたりの装甲とか、甲虫類の外骨格みたいでカッコいいよ」

アリシア「こうちゅうるい…。って、虫！？ねえ…。ウエルキン…。虫みたいって言われて、喜ぶ女の子っていると思う？」

ウエルキン「え…。甲虫類だよ？カブトムシだよ？虫の王者だよ！？嬉しくないかなあ」

アリシア「分かったわ…。ウエルキンらしいほめ言葉として素直に受け取っておきますか」

ウエルキン「そういえば、そのスカーフ…。ずっとかぶっているね」

アリシア「ん、これ？パン屋で働いていた時のスカーフなんだ」

ウエルキン「へえ、そうだったんだ」

アリシア「今は軍隊にいるけど、パン屋で頑張った気持ちを忘れたなくて。また働ける時まで、つけていようって決めたんだ」

ウエルキン「そっかあ…。アリシアがまたパン屋で働き始めたら買いに行くよ」

アリシア「あら、約束よ？焼き立てのパンをたくさん食べさせてあげるね」

ウエルキン「ああ、約束するよ。よし、準備も終わったし、中隊長のところへ出頭しようか」

## 隊長任命

中隊長の部屋へ出頭したウエルキンたち。中隊長のエレノア・バロットが志願兵たちに各小隊への配属を言い渡している。

バロット「マツト・コネリー伍長」

コネリー「はい！」

バロット「第3小隊へ配属」

コネリー「はっ！」

バロット「エマー・ワイズ軍曹」

ワイズ「はい！」

バロット「同じく第3小隊へ」

ワイズ「はっ！」

バロット「…ウエルキン・ギウンター少尉」

ウエルキン「はい！」

ギウンターと聞き、周りの志願兵がざわめく。

「ギウンター！？」

「ギウンターって、あの…？」

一呼吸おいて、バロットが口を開く。

バロット「本日付けで誕生する第7小隊の隊長に任命する」

アリシア「え？」

ウェルキン「……………」

バーロット「どうした、不服か？」

ウェルキン「いえ……」

バーロット「当然のことだ。高校では機甲訓練、大学では幹部候補  
教練課程を履修済み。その上、貴官はあのガリアの英雄、ギユンタ  
ー將軍の息子なのだからな」

ウェルキン「しかしバーロット大尉、僕には実戦経験がありません。  
それをいきなり小隊長というのは……」

バーロット「ブルール撤退戦での活躍は聞いている。貴官にはすで  
に実戦経験があると我々は考えている」

ウェルキン「でしたら、一つお願いがあります」

バーロット「なんだ、言ってみろ」

ウェルキン「ブルールより持参した戦闘車輛の使用許可をいただけ  
ないでしょうか？」

バーロット「戦闘車輛？」

ウェルキン「あの車輛には癖がありまして、メンテナンスを行える  
者がごく限られています。ですので……」

机の上にある資料を確認するバーロット。

バーロット（なるほど、そういうことか）

ウェルキン「……………」

バーロット「いいでしょう。イサラ・ギユンター伍長」

イサラ「はい！」

バーロット「第7小隊に配属します」

イサラ「はっ！」

ウェルキン「ありがとうございます」

バーロット「ギウンター少尉、あなたは今後、いろいろな意味で注目を集めることになるでしょう。戦果を期待します！」

ウェルキン「はっ！」

バーロット「アリシア・メルキオット軍曹」

アリシア「はい！」

バーロット「第7小隊、ギウンター少尉付きの下士官として、彼の補佐を任せます」

アリシア「はっ！」

配属命令が終わり、解散となった志願兵たち。ウェルキン、アリシア、イサラ、スージーは同じ第7小隊に配属となった。

アリシア「みんな同じ隊になれてよかったね」

ウェルキン「ああ、そうだね。これからもよろしく頼むよ」

ファルディオ「ウェルキン・ギウンター少尉！」

背後から声。端正な顔立ちをした男が近づいてくる。

ファルディオ「よう！久しぶりだな、ウェルキン！」

ウェルキン「ファルディオ！ファルディオじゃないか！」

## 友との再会

食堂へ移動したウエルキンたち。ファルディオがコーヒーを一口飲み、口を開く。

ファルディオ「やあ、久しぶりだね、イサラ」

イサラ「はい。ファルディオさんもお元気そうで」

ウエルキン「そうかあ…。ファルディオはもう義勇軍にいたんだ」

ファルディオ「ああ、オレは第1小隊の隊長だ」

ウエルキン「正規軍には行かなかったんだね」

ファルディオ「まあな…」

スージー「…それで、ウエルキンさんとはどういうご関係なのですか？」

ウエルキン「大学の同級生さ」

ファルディオ「ウエルキンは生物学、オレは考古学を専攻していた」

アリシア「専攻が違うのに仲がいいんですね」

ファルディオ「うん、なんて言うんだろうなあ。強いて言えば…、変人同士が惹かれ合ったとも言うのかな？」

ウエルキン「うん、そうかもしれないね！」

アリシア「ふふふつ、なんとなく分かるなあ。ウエルキンの友達って、なにかしらおかしい人のような気がするもの」

ファルディオ「なら、キミたちも変人の仲間入りってことになるな」

アリシア「もう！女の子に向かって、それはないでしょう！」

一斉に笑うウエルキンたち。するとファルディオが真面目な顔で尋ねる。

ファルディオ「でも驚いたよ、ウェルキン。まさかお前がこんなに早く義勇軍に参加するとはな。あれだけ争うことを嫌っていたお前がなぜなんだ？」

ウェルキン「なぜって…、国民皆兵制度に例外はないだろう？」

ファルディオ「嘘だな。兵役を逃れる方法なんていくらでもあるし、国外へ逃げることもだってできたはずだ」

ウェルキン「…ブルールが占領された時、僕も街にいたんだ。人が死んでいく姿を見た時に…、破壊された街を…、壊された風車を目の当たりにした時に思ったんだ。この戦争を一刻も早く終わらせなければいけない…。もう一度あの場所に戻るためには…、僕も戦わないといけないんだって」

アリシア「ウェルキン…」

ファルディオ「そうか…」

ファルディオが立ち上がった。そして、ウェルキンに手を差し出す。

ファルディオ「ようこそ、義勇軍へ。これからはオレとお前は戦友だ！」

ウェルキンも立ち上がり、その手を力強く握る。

ウェルキン「ああ！」

## 不信任

アリシア「全体、整列！これより第7小隊隊長からの着任の挨拶があります。それではギンター少尉、お願いします」

ウェルキン「今日から一緒に戦うことになったウェルキン・ギンターです。よろしく」

敬礼をする隊員たち。

ウェルキン「…みんな、堅苦しいのは抜きにしよう」  
アリシア「や、休め！」

一次大戦を参戦したラルゴと自警団に所属していた経験のあるロージーはウェルキンに対して不服そうにしている。

ラルゴ「けっ、大学出のひよっこが。実戦経験もないくせに、偉そうに隊長様気取りかよ」  
ロージー「ああ。英雄の息子だかなんだか知らないが、気に入らないね」

ウェルキンの挨拶は続く。

ウェルキン「まず、みんなに言っておきたいことがある。戦闘にお

いて一番大切なことはなにか、キミたちには分かるか？」

ラルゴ「ふん、そんなの決まってる。経験だよ、経験」

ウエルキン「うん、確かに経験は大切だ。でも、一番大切なことじゃない」

ラルゴ「あ？」

ウエルキン「一番大切なのはキミたちの命だ」

ウエルキンの予想外の答えに隊員の誰もが驚く。

ラルゴ「なにを甘ったれたことを……！」

ウエルキン「戦いを続けていけば、いろいろなことがあるだろう。

つらいことや楽しいこと、嬉しいことや悲しいこと。しかし、そのどれも生きていなければ味わうことはできない。死ねばそれで終わりだからな。どんな状況に陥ろうとも、生きてさえいれば希望はある。これだけは忘れないでいてほしい。死ぬな！これから僕がこの小隊を率いていくにあたり、キミたちの命を守るために全力で努力すると誓う。だからキミたちも、生き残るために全力で努力してほしい。以上だ」

ウエルキンの挨拶が終わり、解散となった第7小隊。

ラルゴ「どんな状況に陥ろうとも、生きてさえいれば希望はある！だってよ。まったく、ご立派ご立派。さすが大学出のボンボンは言うことが違うわな」

ロージー「ホントだよ。あんなちゃんけな演説で、あたいらを飼い慣らそうってんだからね」

エミール「でも…」

ロージー「ん？」

エミール「僕はあの人ならついていてもいい気がするんだけどなあ…」

ヤン「そうねえ、顔もハンサムだし。うふふっ」

ラルゴ「…つたく、どいつもこいつも。しかし、とんだ貧乏くじだな。よりによつてあんなのが隊長とはな」

ロージー「…でもこの小隊にはもっと洒落にならない問題があるよ」  
ラルゴ「あ？」

ロージーの視線の先にはイサラとリンがいる。

ラルゴ「あの2人が…」

ロージー「ああ、間違いなくダルクス人だよ」

## 將軍とは

ガリア義勇軍が拠点としているアマトリアン基地。今この会議室では各小隊長が集まり、作戦会議が行われている。

バーロット「我が軍の防衛ラインは帝国軍の侵攻により、本土深くまで押し込まれているのが現状である。しかし我々も黙ってこれを見過ごすつもりはない。現在、正規軍と義勇軍を含め、部隊再編を進めている最中である。体制が整い次第、我が軍は速やかに反撃に移る。その第一の目標がここ、ヴァーゼル市だ」

ウェルキン「ヴァーゼル……」

バーロット「知つてのとおり、ここヴァーゼルは交通の要所だ。特にヴァーゼル橋は首都ランドグリースへと続く街道が通る、最も重要な地点である」

ファルディオ「……つまり、我々は喉元に剣を突きつけられている……」  
バーロット「その通りだ。この橋をどちらが手中に収めるかによって、戦局は大きく変わってくるだろう。我ら義勇軍は部隊再編完了後、速やかにヴァーゼル市へと出撃する。各小隊は出撃準備を怠るな！以上」

会議が終わり、解散しようとして立ち上がるウェルキンたち。その時、1人の男が会議室に入ってきた。

ダモン「ほほう……。義勇軍ごときでも作戦会議をするのか？」

会議室に入ってきたのはガリア中部方面軍総司令官ダモンであった。バーロットは彼を見るやいなや、眉をひそめる。

バーロット（ふう、この人が…）

ダモン「バーロットよ、いつまで部屋に閉じこもっているつもりだ？」

バーロット「申し訳ありません。すぐに出発します」

ダモン「まあ、所詮は寄せ集めの民兵どもだ。大して戦果は期待できぬがな」

ファルディオ「なに…？」

ダモンに詰め寄ろうとするファルディオ。しかし、バーロットがそれを制する。

バーロット「橋を防衛していた正規軍があっさり敗れたことも、私には戦果として期待外れでしたわ」

ダモン「なっ…！」

バーロット「いずれにせよ、ヴァーゼル橋は重要な戦略地点。速やかに奪還いたします」

ダモン「せ、せいぜい頑張ることだな！」

ダモンは足早に会議室から去っていった。

ウェルキン「今の人は…？」

ファルディオ「ダモン將軍だ。中部方面軍の総司令官さ」

ウエルキン「中部方面軍…。僕たち義勇軍も、そこに編成されていたね」

ファルディオ「野を刈るウサギがオレたちならば、奴はキツネといったとこかな」

ウエルキン「天敵ってこと？」

ファルディオ「その通り。ダモンは貴族出の正規軍のお偉いで、名家の出身というだけで將軍になった、ただのお荷物さ。権威という衣をまとい、餌に群がる…。まさにキツネのような男だ。オレたち義勇軍を仲間と思ってないどころか、目の敵にしている」

ファルディオの言葉にウエルキンがきつぱりと否定する。

ウエルキン「いや、キツネはそんな卑しい動物じゃないよ」

ファルディオ「ははっ、確かに。あの男と一緒にされたら、キツネが気の毒か」

ウエルキン「戦争が始まって、みんなが一丸となって戦わなければならぬ時期に…、正規軍とか義勇軍だとか、そんなこと言っている場合じゃないのにな」

ファルディオ「……………」

## 内紛

ヴァーゼル市に到着し、西岸に陣地を構えた義勇軍。ここでも再び作戦会議が行われている。

バーロット「これより正規軍ヴァーゼル防衛大隊と共同で、“春の嵐”作戦が開始される。我が義勇軍は本作戦の先陣を切る形でヴァーゼル橋を渡り、東岸敵本陣を制圧にかかる」

ファルディオ「大尉、ヴァーゼル橋を渡るには敵橋頭堡を突破しなければなりません。正規軍からの援軍や物資供給などの支援はあるのでしょうか？」

バーロット「正規軍は我々が橋頭堡を攻略した段階で、攻勢を開始するとのことだ」

ファルディオ「そんな……。オレたちを捨て駒みたいに扱いやがって……」

バーロット「諸君らの気持ちは分かる。私も兵士時代には同じことを感じていたわ。だけど、時に無茶や無理を承知で作戦にのぞむのが軍隊というものなのよ」

ファルディオ「……分かりました」

バーロット「しかし、ファルディオの意見も一理ある。我々だけであの橋頭堡を突破するにはどうしたものか……」

沈黙が続く会議室。それを破ったのはウェルキンだった。

ウェルキン「バーロット大尉、橋付近の偵察に行つてよろしいでしょうか？」

バーロット「橋の偵察…？ああ、構わないが」

その時、アリシアが会議室に走り込んできた。

アリシア「ウエルキン！」

バーロット「メルキオット軍曹、どうした？」

アリシア「あつ…、作戦会議中にすみません！」

バーロット「もう終わったから大丈夫よ。それよりなにか用事があったのでは？」

アリシア「は、はい…。ウエル…、ギンター隊長！隊員同士が口論を起こしているんです」

ウエルキン「口論？」

アリシア「隊長に止めていただきたく、ご同行をお願いしたいのですが…」

ウエルキン「え、僕が？」

少し考え込むウエルキン。そして、アリシアの予想もしてなかった答えがかえってくる。

ウエルキン「うん…、させておけばいいんじゃない？」

アリシア「させておけばいいって…、なにを無責任なこと言ってるんですか！」

ウエルキン「無責任というか、思っていることを言うのって、結構重要なんじゃないかなあ。お互いの意見をぶつけ合うことで結束力が強まることだってあると思うよ」

ファルディオをはじめ、他の小隊長たちも笑いをこらえている。

ファルディオ（まったく、相変わらずこの男は…）

アリシア「そ、それは…そうかもしれないが…。しかし！隊員同士が衝突しているのを黙認するわけにはいきません！さあ、ご同行をお願いします！」

ウェルキン「ちょ、ちょっと…」

納得のいかないアリシアはウェルキンを無理やり引っ張っていく。

ファルディオ「あいつの隊も…大変ですね」

バーロット「そうやって隊は成長していくものよ」

## ウエルキン、宣言する

ロージー「……………」

イサラ「……………」

ロージーとイサラのにらみ合いが続く中、ウエルキンが現場に到着した。

ウエルキン「やめないか！」

ロージー「ふん…」

ウエルキン「一体、なにがあつたんだ？」

ロージー「言わなくても分かるだろ！こいつらだよ！なんでこの部隊にダルクス人が紛れ込んでるんだ？こんな不吉で油くせえ奴らと一緒に戦えるか！こいつらは大昔からロクなことをしない疫病神なんだよ！」

イサラとリインを見つめるウエルキン。

イサラ「確かに、私たちはダルクス人ですが、あなたとなんら変わりのない人間です。それに“ダルクスの災厄”は歴史的根拠のない風説にすぎません」

ロージー「なんだと！？あたいが言いがかりをつけてるってのか！」  
ウエルキン「よせ！」

その時、静観していたラルゴが静かに口を開く。

ラルゴ「隊長さんよお……。オレたちはダルクス人と一緒に戦えねえんだよ。それに実戦経験もない坊主の言うことなんざ誰も聞きやしねえよ」

ウエルキン「……そんなに僕の指揮が不安なら賭けをしよう」

ラルゴ「あ？」

ウエルキン「僕は48時間以内に……。この第7小隊だけでヴァーゼル橋を奪還してみせる。もしも僕の作戦が失敗したら、隊長を辞任しよう。その代わり、作戦が成功したら……。以後は僕の指示をきちんと聞いてくれるかな？」

ウエルキンの突拍子もない言葉に驚きを隠せないラルゴ。

ラルゴ「はっはっは！お前、今の台詞に二言はねえな？」

ウエルキン「もちろん」

アリシア「ちょ、ちよつと……。ウエルキン……」

## ウエルキンの真意

川を眺めているウエルキン。そこにアリシア、イサラ、リインがやって来た。

アリシア「ウエルキン！」

ウエルキン「ん？どうかした？」

アリシア「もう…。どうかした、じゃないでしょ。無茶な約束するんだから」

イサラ「兄さん、私が言い争いをしたばかりに…。すみませんでした」

リイン「私も…。隊長、申し訳ありませんでした」

ウエルキン「キミたちが謝る必要はない。誰もが不安なんだよ。それに、この困難極まりない作戦だ。誰かにあたりたくなる気持ちも分かる」

アリシア「うん…」

ウエルキン「僕はね…。この作戦を成功させて、小隊の気持ちを一つにしたいんだ」

アリシア「気持ちを一つに…。か」

リイン「でも、48時間以内に橋を奪還するなんて、一体どうするつもりなんですか？」

ウエルキン「ううん、それなんだけど…」

川の観察を続けるウエルキン。すると、なにかを発見した。

ウエルキン「おっ！」

アリシア「え、なに？」

ウエルキン「やつぱり…。この川にもあったか！みんな、キミたちに頼みがある」

アリシア「頼み…って？」

ウエルキンが3人に説明をする。

ウエルキン「…と、いうわけさ」

アリシア「ええ！？そんなこと、本当にできるの？」

リンもアリシアと同じ顔をしている。

ウエルキン「イサラ、明朝までに準備は間に合うかい？」

イサラ「はい。すぐに取りかかります」

アリシア「…分かった。ウエルキンを信じる」

リン「イサラさん、私にも手伝わせてください」

イサラ「はい。リンさん、よろしく願います」

ウエルキン「ありがとう、みんな。それじゃあ、頼んだよ」

## 渡河作戦

明朝となり、ウエルキンが隊員たちを集めた。

ラルゴ「で…、作戦とやらを聞かせてもらおうか。やっぱりできません、とかぬかすんじゃないぞ？」

ウエルキン「これから我々はヴァーゼル橋東岸の敵防衛拠点に攻勢をかけ、これを制圧する」

ロージー「おい、あんた…。あたいたちに死ねって言うてんのか！この人数で橋頭堡が突破できるわけないだろ！」

ウエルキン「僕はこの小隊で橋頭堡を突破するとは言っていない。僕たちが突破するのは…、この川だ」

ラルゴ「なんだと…？」

ウエルキン「これより朝霧に紛れてヴァーゼル川を渡河し、東岸の敵防衛拠点に奇襲をかける」

ラルゴはウエルキンの言葉に驚きを通り越して、呆れている。

ラルゴ「おい、坊主。お前は戦争をなめてんのか？歩兵は泳いででも川を渡れるかもしれねえが、戦車がなけりゃ敵の陣地は蹴散らせねえぜ！」

ウエルキン「もちろん考えてある。イサラ」

イサラ「エーデルワイス号に潜水走行可能なように、耐水処置を施しました。数分間だけしか持ちませんが、渡河するには十分です」

ラルゴ「だ…、けどよ、この川は船も通るんだぜ？とてもじゃないが、戦車の潜れる深さじゃねえ！」

ウェルキン「大丈夫。ほら、あそこを見てくれ」

ウェルキンが指差した先にはある植物があった。

ロージー「なんだ…、草か？」

ウェルキン「ヤドリアシだ。河川の下流域から汽水域上部に分布する植物だよ。川の植生を観察してたら分かったんだ。ここは他の場所に比べて水深が極端に浅い。この場所からなら、戦車で水中走行ができるはずだ」

ラルゴ「……………」

(こいつ…)

合点がいったラルゴは言葉が出ない。

アリシア「作戦内容を伝えます。まずエーデルワイス号は水中走行で対岸に上陸、渡河地点の哨兵を蹴散らします。その後、ギユンター隊長の信号弾を合図とし、歩兵部隊は渡河ボートにて対岸に上陸、一気に敵拠点を制圧します」

ウェルキン「よし、これより作戦を開始する。僕たち第7小隊の初任務だ。みんな、頑張ろう！」

## ヴァーゼル橋奪還戦

東岸の敵本陣では1人の哨兵が川を見つめている。

「どうした？」

「お、おい……。なんだ、あれは！？」

エーデルweis号が渡河に成功し、東岸に戦車をつける。

「う、うわっ！」

「川から戦車だと！？そんなバカな！」

搭乗口から顔を出すウェルキン。

ウェルキン「ふう……。エーデルweis号、渡河成功！作戦開始！」

ウェルキンが信号弾を放った。

パン！

イサラ「兄さん、パージします！」

ウェルキン「よし！攻撃開始だ！」

ドガア！！！！

ボートで待機していたラルゴたちは驚きを隠せない。

ラルゴ「あの野郎、本当に渡りきりやがった……！」

ウェルキンがイサラに指示を出す。

ウェルキン「移動開始！速度をゆるめるな！敵にこちらの数を悟られないようにする！」

イサラ「了解！」

ドガア！！！！

エーデルワイス号の奇襲を受けた帝国軍は混乱し、陣形を立て直すことができない。

「て、敵襲……っ！」

「数は……！」

「ふ、不明です！」

「バカな……。一体どこから……」

ドガア！！！！

ボート第1班のラルゴ、ロージー、ヤン、ホーマー、オスカー、エミールが東岸に上陸した。

バン！

バン！

ババババ！

「うおっ！」

「ぐわっ！」

次々と帝国戦車を破壊していくエーデルワイス号。

ウェルキン「右20！撃てーーーーっ！」

ドガア！！！！

第2班のアリシア、スージー、イーディ、リイン、カロス、マリー  
ナも合流する。

バン！

バン！

バン！

「北だ！北に戦力を集中させろ！」

「完全に包囲されてます。もうダメです…」

「くっ…！」

こうして第7小隊は帝国軍に満足な反撃を許さないまま、ヴァーゼ  
ル橋奪還に成功した。

## 初任務成功

ヴァーゼル橋を奪還した第7小隊。戦車で川を渡るといふ事實はガリア軍のみならず、帝国軍にも大きな衝撃をもたらした。

ウェルキン「みんな、ご苦労様。キミたちのおかげでヴァーゼル橋を奪還することに成功したよ」

エミール「本当にここまで上手くいくなんて…」

オスカー「ああ、正直驚いたぜ」

ヤン「大した人ね、隊長さんは」

ウェルキンの前に立つラルゴ。その場に緊張が走る。

ウェルキン「ラルゴ、賭けは僕の勝ちだ。これからは僕の指示に従ってくれるね？」

ラルゴ「…なんて奴だよ、まったく」

ラルゴがその場を立ち去った。

ロージー「まあ、隊長には従ってやってもいいけどさ。でもあたいは絶対にダルクス人を認めるわけにはいかないよ」

イサラとリインに目をやり、ロージーも立ち去る。

アリシア「ちょっと！もう……」

イサラ「アリシアさん、いいんです。慣れてますから。でも……、いつかダルクス人とみんなが分かり合える日が来ることを信じています」

アリシア「イサラ……」

ウェルキン「……………」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6004x/>

---

GALLIAN-CHRONICLES

2011年10月24日12時59分発行